E 28

ニューメディア時代にむけての家庭生活のあり方に関する研究 (I)
ニューメディア操作能力からのアプローチ

聖母女学院短大　○伊東理恵　別府庸子　澤田寿々太郎　福井美穂

目的　エレクトロニクス技術を背景とする高度情報化の波は、いよいよ家庭へと波及しようとしている。企業はニューメディアの開発に鎬を削っているが、家庭の側にこれを有効に受容する受容態勢ができているとは言い難い。ニューメディアが企業の論理のみによって開発され、家庭に普及していくことは、家庭のプライバシーや家庭管理の主体のあり方等々で問題を生ずる虞れを孕んでいる。家庭生活者がニューメディアによってできるだけ多くの恩恵を受け、逆に、ニューメディアの弊害を最小限度にとどめるためには、企業の論理で造られたニューメディアが家庭に浸透してしまう前に、ニューメディアに対する受容態勢を整えると同時に、ニューメディアを家庭主体のものにするにはどうすれば良いかを検討し、その成果をニューメディアの設計思想に反映させるべく提言を行う必要がある。この研究では、その第1歩としての基礎となるデータとして、主婦のニューメディア操作能力を把握することを目的とする。

方法　キャプテンターミナルによる情報検索試行実験　　対象：主婦・学生

結果　既に商品化されている代表的ニューメディアの一つであるキャプテンは、主婦が日常的に使いこなせるほど操作性は優れてはいない。実験対象となった主婦は、実験に協力したことから推察しても、一般の主婦よりはニューメディアへの関心の強い主婦であるが、それでも解説書だけで目的の情報を得ることは非常に困難であった。このことからいえば、より簡単に操作できるようニューメディアを改善していく必要がある。しかし、現在の技術で操作性のみを追求することは、データ保護やセキュリティの観点からみると大きな問題点を残すことにつながる。開発コストや効率に優先して、この点の十分な配慮が必要である。